

「ささえ」

2014年7月発行 情報誌 第48号

発行NPO福祉用具ネット事務局

住所: 福岡県田川市伊田4395(福岡県立大学内)

TEL/FAX: 0947-42-2286

E-mail npo-fukusiyounet@sage.ocn.ne.jp

HP <http://www10.ocn.ne.jp/~npofynet/enter.htm>

情報誌「ささえ」は年4回(1月・4月・7月・10月)発行しています。

印刷 よしみ工産(株) 北九州市戸畑区天神1丁目 13-5

福祉用具はあなたの自立をささえます。

あなたのささえがNPO福祉用具ネットを元気にします。

【商品名】自動排泄処理装置
尿吸引ロボ「ヒューマニー」



夜ぐっすり眠れるから
昼間頑張れる!



【発売元】ユニ・チャーム ヒューマンケア(株)

【商品名】床ずれ防止用ハイブリッドマットレス
「アルファブラ ソラ」

SORA



新発売
ハイブリッド型
車いす用クッション

【商品名】
アルファブラ
ソラ クッション



【発売元】(株)タイカ



特定非営利活動法人
NPO福祉用具ネット

「大切な芽を皆さんのやさしさに包まれながら育てていきたい・・・」

シリーズ1 福祉用具メーカーから介護現場の皆様へ

ユニ・チャーム ヒューマンケア(株)代表取締役社長 白井光比呂

1. 高齢者介護における排せつケアの意味

ユニ・チャームでは、在宅介護者の皆さんに定期的に大規模調査を行っている。その中の「最も辛い介護は？」という質問に、圧倒的1位に挙げられるのが排せつケアだ。70%超の方が1位として挙げ、第2位の入浴ケアを大きく引き離す。

2つの理由が考えられる。1つは不潔物を扱うという心理面での負担、2つめには、日に何度もオムツ交換や介助をしなければならないという身体的負担。

過去ユニ・チャームは、「寝たきりゼロをめざして」というスローガンのもと、リハビリパンツという価値を創出、トイレでの自力排せつを推奨することで、日本独自の排せつケアの常識作りに貢献してきた。これは、厚生労働省が志向する「自立支援」というコンセプトとも合致し、排せつケアを巡る世論を正しい方向に導いてきたという自負がある。

にも関わらず、リハビリパンツ発売後既に20年近くの時間が経過しようとしている現在、未だ多くの介護者が最も辛い介護として排せつケアを挙げてしまう現状は一体どうしたことだろう。

2. 理念なき「自立支援」の迷走

厚生労働省の指導により、現在日本の介護現場は自立支援一色だ。サービス提供者は全員そのスローガンに沿って、一所懸命に取り組んでいる。

では、自立支援とは一体何だろう？ここで私見を述べさせていただければ、私自身「自立とは、心身共に前向きに生活すること」だと考えている。であるとすれば、こういった生活の実現には自ずと前提条件が必要で、それこそが「夜間はぐっすりと眠ること」ではないだろうか。私たち現役の職業人も、徹夜や寝不足が続けば意欲的で前向きな仕事なんてできない。増して、心身ともに虚弱な高齢者にとっては尚更だ。

しかるに、現在の介護サービスは本当にご本人、介護者の安眠を迫及しているだろうか？残念ながら私にはそうは思えない。これが、私の考える「理念なき自立支援の迷走」だ。これは、介護の根幹に関わる大変な問題だと思う。

排せつケアの分野は、その典型だ。私どもの調査によれば、夜間何らかの理由でオムツ交換をされている在宅介護者は、未だ4割弱に上る。一晚

中の尿を吸収できるというオムツがこれだけ多く販売されているにも関わらずだ。これでは、昼元気に前向きにと言っても無理な相談だ。又、障がいを持たれた方々も、日々の生活において、常に自らの排せつ条件を満たすトイレの所在を事前に確認し、その場所にしか外出できない。生活の場面が大いに狭められていると言わざるを得ない。

3. 排せつケアイノベーションへの確信

こういった環境下、2009年3月にユニ・チャーム(株)、日立製作所の共同出資でユニ・チャームヒューマンケア(株)は設立された。尿吸引ロボヒューマニーの普及促進のみをミッションとする会社だ。おかげさまで過去5年間、ヒューマニーは多くのお客さまにご使用いただき、沢山の感謝の言葉をいただいた。そのうち、いくつかの事例を簡単にご紹介したい。

長期にわたる夜間オムツ交換による不眠の蓄積で、心身ともに疲弊しつくし自殺まで考えていたが、ヒューマニーによって救われたと言って涙を流してくださった老々世帯の奥さまがいらっしゃった。

或いは、身体障がいによる排せつ問題で、仕事も私生活も活動範囲を限定されていたが、ヒューマニーによって、どこにでも出かけられるようになったと明るく話してくださった男性ご本人とその奥さまがいらっしゃった。

又、学校でのオムツ交換が不憫だというお母さまの心配りで、小学校5年生からヒューマニーを使い始めた脳性マヒの男の子は、今年から中学校に通うようになり、演劇部に入ったとご両親とともに、わざわざ報告に訪れてくれた。この春休みには、ご両親と3人でハワイに卒業旅行に行ってきたと教えてくれた明るい笑顔がとても印象的だった。

これらの事例から、私たちはヒューマニーの普及は、間違いなく在宅排せつケアにイノベーションをもたらし、自立支援に貢献できると確信を深めたものだ。

4. 特定福祉用具から貸与対象品目へ

結果、排せつケア改善の重要性、ヒューマニーの有用性は厚生労働省にもご理解いただけることとなり、2012年4月からは、それまでの「特定福祉用具」から「貸与品目」へと変更されてい

る。名称も、「特殊尿器」から「自動排せつ処理装置」へと改称された。

貸与への変更目的は3点。1つめは、ご利用者さまがより少ないコストで、気軽にご使用いただける環境を整えること。2つめには、貸与品目とすることで、ケアマネジャーの関与度をより高め、対象者発見を加速すること。3つめには、貸与事業者の現場関与度を増し、使い始めに起こりがちな失敗や、使い慣れまでの心理的ハードルをサポートいただく体制を作ることにあつた。

この制度変更によって、厚生労働省も私どもも、介護ロボットの先駆けであるヒューマニーによる在宅排せつケア改善を大いに期待した。

5. 立ちはだかる普及への壁

にも関わらず、尿吸引ロボヒューマニーは未だ大きな普及の壁に阻まれており、貸与品目変更後もその普及は遅々として進んでいない。その要因は、大きく2点に集約できる。

1つめは、事実上の福祉用具導入意思決定者であるケアマネジャー、或いは福祉用具専売権を有する貸与事業所という組み合わせが、典型的な身体介助分野である排せつケアとの相性が悪いという問題だ。福祉用具導入には、導入に適すると思われる対象者の発見、適合性判定、導入に際しての使い方指導、アフターフォローというプロセスが必要となるが、いずれのプロセスも日々の身体介助への関与度が低いケアマネ、専門相談員には荷が重い。よって、まずは最初のハードルである対象者発見の効率が極めて悪い。又、例え対象者を発見できたとしても、身体介助が不得手な専門相談員では使い方指導が満足にできず、実使用場面で多くのトラブルを抱えることとなる。結果、いくつかの失敗体験がケアマネ、専門相談員のモチベーションを低下させ、積極的なご利用者さまへの紹介活動、導入が図られないというバッドサイクルを生み出してしまふ。

そもそも排せつケアという分野は、対象者の体格や身体条件の差が大きいため、例え紙オムツでさえ十分に使いこなすには相応の時間が必要だ。そのため、ベッドやマットレスのように手離れ良く導入を図ることが難しい。しかし、多くの手間をかけてまで自分たちの苦手とする分野に積極的に取り組もうとする貸与事業者は稀で、櫛の歯が抜けるように取扱い事業者が減少している現状がある。

結果、貸与事業者からケアマネへの紹介活動が行われず、ケアマネ自体の商品知名が全く向上しないという事態に陥る。これが2つめの要因だ。ユニ・チャームでは毎年ケアマネがどれ程ヒューマニーを認知しているかを調査しているが、発売

から3年半を経過し、貸与品目への移行後半年が経過した昨年11月時点においても、ヒューマニーのケアマネ知名率はわずか14%という絶望的な数値であつた。残念ながらこの状態では、必要なお客様に情報は伝わらない。

この事実は、今後如何に優れた製品、ロボットが開発されようとも、それが身体介助に近ければ近い程、導入に手間がかかればかかる程普及が難しいということを端的に表している。リフト、昇降機等の普及が遅々として進まない現状からも、この問題の根深さをご理解いただけるものと思う。

6. 介護ロボット普及の肝は、作る工夫より普及させる工夫

今後益々深刻化する高齢化にあつて、厚生労働省は介護の場として在宅に大きく舵を切っている。多くの国民も自宅での介護を望んでいる。しかし残念ながら、現在の人力に頼る介護を継続すれば、この希望を叶えることは難しい。労働力不足はもちろん、万が一人手を確保できたとしても、このやり方では、財源は限りなく肥大化してしまう。

であれば、今こそ人力を用具に置き換える大胆な発想の転換が必要だ。住宅環境を整備し、必要な用具を全て導入し、最低限の人手で介護を行う。しかしその理想を実現するには、これまでヒューマニーが経験してきたような普及ハードルを越えるための条件整備がなされることは絶対条件だ。課題の本質は「作るより普及することにある」ということを、私たちは今一度肝に銘じたい。

簡単に売れる商品だけが良い商品なのではなく、私たちには良い商品をお客様に届けるための努力を継続する使命がある。その気概がなければ、国民の税金や保険から生業を得る資格はない。

先日、国際福祉機器展期間中に、NHKで介護用ロボットの特集が生まれ、その中でヒューマニーをご紹介いただいた。その直後から、我社にはお客様からの問い合わせ電話がひっきりなしにかかり、「番組を見たので現物を見たかった」と言って、多くの方に弊社ブースを訪れていただいた。その方たちが異口同音に語っていたのは、「これまで誰もこんな商品があることを教えてくれなかった」「もっと早く知りたかった」という内容だった。ある女性は、眠れない生活に疲弊しつくしており、「まるで神様に会ったようだ」と涙ぐんだ。

9. 今こそ、全体最適を実現するための理念、ビジョンが必要

直近介護用ロボットへの開発助成が盛んに行われている。本年度も重点分野、重点テーマに多くの予算が割かれている。しかし、敢えて今一度言わせていただくなら、現在の福祉用具を巡る規制等の現状を放置したま

までは、どんな優れた製品が登場したとしても普及へのハードルは相当高いのではないかとと思う。

あらゆる部分に問題があり、課題がある。それをモグラたたき的に対処していたのでは、全体最適は得られない。重要なのは、目の前の問題を解決するための手段、方法論に終始するのではなく、あるべき介護生活と現状とのギャップを正しく認識し、その課題を解決するためのプロセスを思い描く演繹的発想と、業界全体をひとつの方向に収斂させる理念・ビジョンなのではないだろうか。

そこから、部分毎の問題や課題を解決するためのシナリオを描くことで、全体最適を導く。そんな強いリーダーシップこそが求められており、このことこそが介護用ロボット普及には絶対に欠かせない条件なのではないかと考えている。

